

左京三条一坊十坪の調査

—第490次

1 はじめに

共同住宅の建設にともなう調査である。調査地は平城京左京三条一坊九・十坪、および三条条間北小路にあたる。調査は十坪北辺部分で実施した。調査区は東西7m南北12m、調査面積84㎡。調査期間は3月12～19日である。

現地表から現代盛土約90cm、旧耕作土・床土約20cmの下で遺構を確認した。遺構検出面は、標高61.8mほどである。検出面は、主として締まりの良い濃暗茶色を呈する砂層で、部分的に黄色の粘土が広がる。この黄色の粘土は、奈良時代の整地土と考えられる。

2 検出遺構

南北溝SD9980 調査区東寄りの東西溝。南で深く北で浅い。調査区の途中で消滅する。検出した長さは8.6m。幅は南端部で約0.5m。深さは南端部で検出面から約25cm。重複関係から、今回の検出遺構でもっとも古い。

掘立柱塼SA9981 調査区南端部分の東西塼。柱間約3m

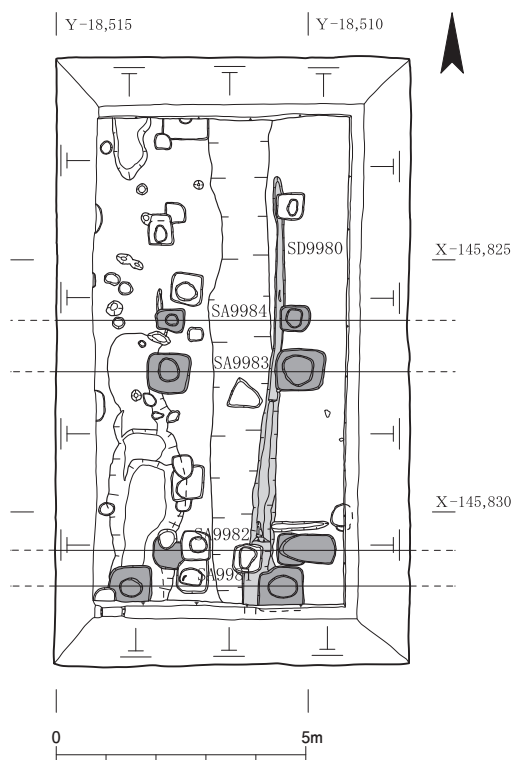


図193 第490次調査遺構図 1:150

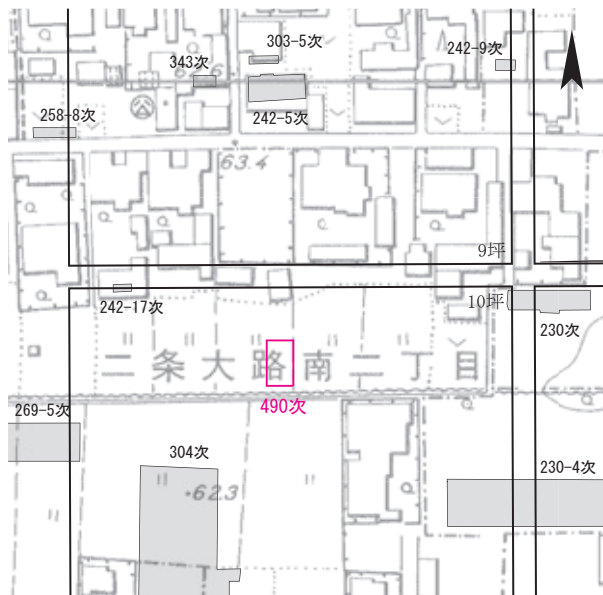


図194 第490次調査区位置図 1:4000

(10尺)。

掘立柱塼SA9982 調査区南部の東西塼。柱穴2基を検出。柱間約2.1m(7尺)。断ち割った柱穴から、柱掘方は東西約0.9m、南北約0.7m、検出面からの深さ約60cm。柱間7尺とすると、調査区西側にもう1基柱穴が想定されるが、検出できなかった。今回同一遺構とした柱穴2基も、平面規模などから別遺構の可能性も残る。

掘立柱塼SA9983 調査区中央付近の東西塼。柱間約2.4m(8尺)。柱掘方は一辺約0.8m、検出面からの深さ約40cm。

掘立柱塼SA9984 調査区北寄りの東西塼。柱間約2.4m(8尺)。柱掘方は東西約0.6m、南北約0.5m、検出面からの深さ約20cm。SA9983と柱筋がそろいが、規模が大きく異なる。副柱か、SA9983が建物であった場合は土廂・縁などの可能性が想定できる。

3 出土遺物

瓦・土器類が出土したが、僅少である。

調査区西端から、玄武岩あるいは安山岩製の両刃石斧(太形蛤刃石斧)が1点出土した。表面は丁寧に研磨され、側面には製作時の敲打痕を残す。残存長12.0cm、刃部幅6.1cm、厚さ4.4cm。

4 まとめ

柱穴群が濃密に分布している状況が確認できた。重複関係などから、少なくとも3時期以上の変遷が存在する。

遺構の分布は偏っており、調査区南側でより濃密であり、北側では希薄になる。これは、坪の北端であることと関係すると考えられる。調査区の北側に近接して条坊関連遺構が存在する可能性が高い。(馬場 基)